

2020年6月

今月の新着図書から

ヴィクトール・ユゴー『レ・ミゼラブル』1-5, 西永良成訳

(平凡社ライブラリー, 2019-2020年)

高等科図書主任

林 知宏

ユゴー(1802-1885)は、フランス19世紀を代表する作家である。そしてこの『レ・ミゼラブル』は彼の代表作である。映画、ミュージカル、TVドラマとして繰り返し制作されてきたので、すでになじみのある人も多いだろう。今回、刊行された版は同じ翻訳者によって、ちくま文庫から出版されていたものの改訳版である。

主人公ジャン・ヴァルジャンは、元徒囚である。彼が刑を終えて社会に復帰し、そこで体験する数奇な出来事と出会う人々(ファンチース、コゼット、マリユス、ジャベール、テナルディエ、等々)との物語が巧みな語り口で綴られる。特に、トゥーロンの刑場で出会った警官ジャベールとの追いつ追われつの攻防はスリルに満ちている。第2部でパリの(現在の)5区から12区の街路を逃げるジャン・ヴァルジャンとコゼットが、最後は女子修道院に逃げ込む場面は、手に汗握ってしまう。「この後、ストーリーがどのように進んでいくのだろうか」と胸をときめかす感覚が、本来の小説の醍醐味なのだとあらためて思う。まさに読書の出発点であり、終着点である。あれこれ理屈は必要ないのだ。

パリに舞台を移してからは、多くの通りの名が出てくる。パリの市街地の地図が傍らにあると臨場感が増す。ただし、現在この小説と同じ場所に同じ名前が存在する場合もあれば、消失してしまっている場合もある。19世紀後半のオスマンの都市計画によって、街の様相が一変してしまったからだ。しかし幸いにも鹿島茂(息子さんは中・高等科の卒業生である)『失われたパリの復元』(新潮社)という著作もあり、小説のリアリティを確認できる。また同じ著者の『「レ・ミゼラブル」百六景』(文春文庫)も良きガイドとなる。

この小説の魅力は、単に物語の展開のみにあるのではない。脇道にそれて、あえて時代背景や社会情勢に対して、ユゴーの考察が示されている部分が興味深く、深みを添えている。例えば、1815年のワーテルローの闘い、(ロベスピエールに代表される)フランス革命からナポレオンの帝政時代、ブルボン家による王政復古の時代から7月革命を経てルイ・フィリップの統治の時代へと、まさしくフランス史(政治史、社会史)の分析として堪能できる。下手な歴史研究の書物よりも説得力がある。ちなみに現代数学の世界で不可欠の理論、ガロア理論の創始者エヴァリスト・ガロア(1811-1832)は、マリユス(1810年生まれと設定)とほぼ同年齢である。第4部でマリユスが1832年6月の民衆蜂起に加わっていく様が描かれるが、ガロアの行動と重なる部分もあり、これもまた見逃せない。